

性的接触などという性感染症（STD）が若い世代で増えている。とりわけ目立つのが、梅毒と性器クラミジアだ。いずれも自覚症状がないまま放置されることも多く、不妊につながったり、胎児に悪影響を与えるリスクを高めたりする。国や専門家は男女に感染予防を呼び掛けている。
（教蓮孝匡）

性感染症

梅毒

日本性感染症学会代議員で広島女性クリニック（広島市中区）院長の永井宣隆医師によると、梅毒は「梅毒トレポネーマ」という細菌の一種が、主に性交などによって粘膜や皮膚から体内に入り、感染。3〜6週間で陰部など感染箇所にしこりができたり、リンパ節が腫れたりする。抗菌薬で治療できるが、放置すると全身に発疹が現れる。進行すると中枢神経に菌



が移り、神経のまひや心臓病を引き起こすこともある。永井医師は「感染している妊婦が適切な治療を受けないと、胎盤を通じて胎児にも影響を与える。流産や早産、死産、胎児水腫などのリスクが高まります」と指摘。胎内で胎児が感染する「先天梅毒」にもつながるといふ。梅毒は1967年の約1万人をピークに減少し、過去の病気がとされてきた。ところが2003年ころから増加傾向に転じる。国立感染症研究所のまとめでは、15年の報告数は全国で2638人（速報値）。10年の4倍強に増えた。過去の病気という意識もあって自分の感染に気がかず、治療が不十分で他人に広げているケースが増えているためとされる。性別や年代別の集計がある。昨年10月28日時点で見ると、患者2037人のうち男性が約7割、女性が約3割。女性

若い世代で



「性感染症はパートナーやわが子にも影響することを実感し、予防意識を高めてほしい」と話す永井医師

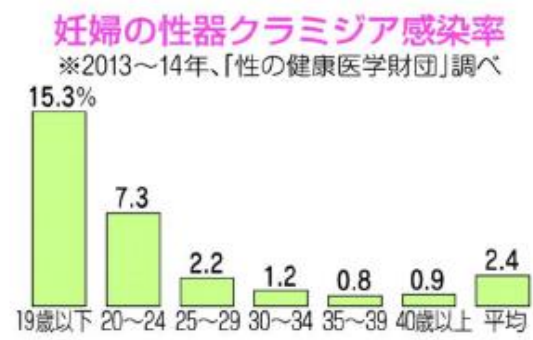
増加中

不妊・胎児へのリスク 注意を

患者の76%に当たる437人は15〜35歳と、若年層に集中している。厚生労働省は、全国の自治体に対策を求める通知を出すなど警戒を強めている。

性器クラミジア

STDのうち感染者が最も多いとされる性器クラミジアも、妊娠・出産に影響を及ぼす。定点医療機関からの報告に基づく推計の患者数は全国約100万人とされる。性交



などが主な感染経路。男性は尿道のかゆみや排尿時の痛み、尿道からの分泌物が主な症状。精巣上体の炎症などを引き、不妊の要因になることもある。女性では子宮の入り口に炎症が起き、水っぽいおりものが増える。「卵管に広がって卵管が狭くなったり、骨盤内に進行して炎症を起したりして、性交痛や不妊の要因となります」と永井医師。肝臓にまで広がって腹痛を伴ったり、胎内感染で新生児の結膜炎や肺炎につながったりする恐れもある。性の健康医学財団（東京）は13年秋〜14年春、日本産婦人科医学会の協力で国内の妊婦約32万人を対象に、初の大規模調査を実施した。その集計によると、2・4%に当たる7690人が性器クラミジアに感染。年代別では19歳以下が15・3%、20〜24歳が7・3%などだった。梅毒と性器クラミジアはいずれも国の妊婦検診の標準検査項目に入っており、ほとんどの自治体で無料化されている。予防は、性行為のときは初めからコンドームを正しく着けるのが効果的。不特定多数との性的接触も感染リスクを高める。永井医師は「STDは男女両方が責任を持って防ぐべきこと。妊婦に限らず、気になる症状が出たり症状はなくても感染を思い当たることがあったりしたら、性的接触を控えて早めにパートナーとともに婦人科や泌尿器科を受診してください」と呼び掛けている。